

序論：前回のおさらい

前回、1章1節から4節までのところでは、「父また御子イエス・キリストとの交わり」の中に、永遠のいのちがあるということを見ました。

「永遠のいのち」とは、神様を信じる者が、将来、天の御国（パラダイス）において、いただく「いのち」のことです。この世で今私たちが持っている「いのち」とは比べ物にならない素晴らしい「いのち」です。クリスチャンには、この素晴らしい「いのち」を将来いただくことができるという希望があります。

しかし、それだけではありません。この手紙を書いたヨハネは、その「いのち」すなわち「永遠のいのち」が、この世に現れたと言っていました。それを私は見たのだと記していました。自分の目で見て、じっと見つめて、さわったのだと、だからそれを伝えるのだと言っていました。「私たちが見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えます」、ヨハネはそう記しています。

そして、自分が見た「永遠のいのち」を、御父=神様や、御子=イエス・キリストとの「交わり」と表現しました。「交わり」というのは、クリスチャン用語ですけれども、「交流」とか「親交」という意味の言葉です。同じ場所で、同じ時間を過ごし、言葉を交わし、意思疎通をすることです。もっと言うなら、共に生活し、共に生きるということです。そういう交わりの中、つまり神とともに生きる交わりの中に、ヨハネは「いのち」を見出したのです。

そこで言われている「いのち」とは、ただ単に肉体的に生き長らえさせるだけのものではありません。人を本当に生き活きとさせるような、そういう「いのち」です。どんなことがあっても、どんなつらい状況でも生きていく勇気を与えてくれる、そういう「いのち」です。生きる意味をあたえてくれる、そのような「いのち」です。

この「いのち」は、クリスチャンにとっての大きな恵みのひとつです。私たちは、そういう「いのち」を神様から日々いただくことができるのです。死後や世の終わりという遠い将来のことではありません。今まさにこのとき、この世に生きていながらにして、神から与えられる「いのち」に生かされて歩む。こんな恵みは、他のどこで得られるのでしょうか。ヨハネは1：4に「これらのことを書き送るのは、私たちの喜びが満ちあふれるためです。」と記しています。「永遠のいのち」に生きる喜びを、他の人々とわかちあうために、ヨハネはこの手紙を書いたのです。

罪を犯さないようになるために

今日の箇所ヨハネは、もう一つ、この手紙を書いた目的を記しています。それが2章1節です。「1私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。」神様との交わりの喜びが満ちあふれるようにと書いた後、次にヨハネがとりあげているのは、「罪」の問題でした。

何故、ヨハネが交わりの喜びの後に、罪の問題を持ち出してくるのか？それは、「罪」が、この交わりを壊し、台無しにしてしまうからです。私たちから、神様との交わり、イエス様との交わりの喜びを奪ってしまうからです。交わりにとどまり続けるためには、罪の問題が正しく扱われ、解決されないといけないのです。

そのことを教えるために、ヨハネは、このあと5つの「もし～なら」(6,7,8,9,10節)という条件や仮定を使って説明していきます。そして、そのときに神様のご性質についてとても大切な2つのことに触れています。その2つの性質は5節と9節に記されています。すなわち、「神は光であり、神には闇が全くない」ということ、そして、「神は真実で正しい方」であるということです。この神様の2つのご性質、

これが今日の箇所の大切なポイントです。

本論1-①：神は光である・神は愛である

まずはじめに、「神は光である」ということを見て参りましょう。それは5節に記されています。5節「私たちがキリストから聞き、あなたがたに伝える使信は、神は光であり、神には闇が全くないということです。」

「神は光であり、神には闇が全くない」というのはどういうことでしょうか？このことは、私たち人間と比較してみるとよくわかります。人間の心は複雑です。友人や知人に何か嬉しい出来事があったとき、それを心から喜ぶことができる時もありますが、妬みの心で一杯になってしまうこともあります。そして、喜びのようにポジティブな感情と、ネガティブな嫉妬のような感情とが、混ざり合って混在しているようなこともよくあることではないでしょうか。だれしも、自分の心を振り返ってみるならば、光のように美しい思いばかりではなく、闇のように虚ろな思いもまた、自分の心の中に存在しているということを認めずにはいられないのではないのでしょうか。他の人には見せられないような後ろ暗い思い、そういう闇を、願ってもいないのに抱え込んでしまう、人の心にはそういうところがあります。しかし、神様にはそういう闇はまったくないのです。それが聖書が伝えていることです。

このあと2：9～11でヨハネは、兄弟を愛する者は光の中にとどまり、兄弟を憎む者は闇の中を歩んでいると言って、「光」を「愛」に、「闇」を「憎しみ」と関連付けています。それを踏まえるなら、「神は光である」とは、「神は愛である」と言い換えることもできるでしょう。「神は愛である」、これも聖書がはっきりと教えていることです。

そして、神様の思いの中、その御心の中に「闇」が全くないというのは、その愛には欠けがなく、完全であるということです。つまり、「神は光であり、神には闇が全くない」ということを、愛において言い換えるのであれば、「神は愛であり、神の愛は完全である。」となるでしょう。

本論1-②：人間の不幸は、完全な愛を知らないこと

私たちは神さまのことを考えるときに、自分を基準にして考えます。自分を基準にしてしか考えることができなからです。それで、まったく闇のない心や、完全な愛というものを、なかなか思い描くことができません。それが人間の不幸であり、悲劇なのです。

試練のとき、人生に苦難があり、困難なことが起きて途方に暮れてしまうようなとき、私たちはすぐに「神様の愛」を疑ってしまいます。この世は、闇の中にあって一筋の光もないんだと考えてしまいます。そんな風に、心に愛や希望を持たないとき、人は生きてはいても死んでいるのと同然です。

本論1-③：神の愛に触れるなら

しかし、御言葉に戻りましょう。ヨハネが記してくれた聖書の言葉に心を留めましょう。ヨハネは、神との交わりに「いのち」を、「永遠のいのち」を見出していました。人を本当に生き活きとさせ、生きる勇気と、生きる意味を与えてくれる「いのち」です。その「いのち」が、キリストとの交わりの中で与えられていました。闇が全くないキリストの心に触れ、神の完全な愛に触れることができたからです。人を本当に生きた者とさせるのは、ただ「神の愛」だけです。神の息吹が吹き込まれたときに、人はただの土くれではなく、生きる者となるのです。

「神は光であり、神には闇が全くない」。このことを述べた5節には、6節、7節の2つの「もし」が続いています。6節をお読みします。「6 もし私たちが、神と交わりがあると言いながら、闇の中を歩ん

でいるなら、私たちは偽りを言っているのであり、真理を行っていません。」簡単に言うと、6節は、神との交わりがある＝神様の完全な愛に触れて、永遠のいのちをいただいているのなら、その人は兄弟を憎むことはできないで、愛するはずだということです。

そして7節にあるように、私たちが神様の光の中に歩み、兄弟を愛していくなら、「互いに交わりを持つように導かれていきます。神様の光の中に歩いていくとき、神の愛の完全さをより深く知っていくようになります。そこには、御子イエス・キリストが十字架で流された尊い血の犠牲があります。そこに、神の完全な赦しがあることを、私たちは知り、体験していくのです。何度も何度も失敗しながら、何度も何度も罪を犯すことを繰り返してしまいがちながら、その度にいつもいつも主の赦しを体験し、神の愛が完全であることを学んでいきます。神との交わりを通して、私たちが神の愛が完全であるということを学んでいきます。これは赦されないだろうと思うどんな大きな罪も赦す用意が、神の側に、神の御心の中にあることを、私たちは知っていきます。神様の愛がどれほどまでに深いのか、神様の愛がどれほど完全なものなのかを、その交わりの中で常に教えられます。

「神は光であり、神には闇が全くない」。これがキリスト者の立っている真実です。神との交わりの中を歩むとき＝神とともに生きるときに、与えられる測り知れない恵みです。ヨハネが、この手紙を読む私たちに伝えたかったのは、イエス様から聞いたこの真実です。

本論2：神は真実で正しい方

次に、「神は真実で正しい方である」という点を見ていきたいと思います。これは、9節にある言葉です。9節をお読みします。「9 もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。」

9節では、3つのポイントを確認したいと思い。

本論2-①：人間には罪がある

まず第1のポイント、それは「人間には罪がある」ということです。9節は「もし私たちが自分の罪を告白するなら」とありますが、これは「私に罪がある」ということが前提となっていることばです。もし罪があるならというのではなく、罪は必ずあるのです。ご丁寧なことに、ヨハネは人間には罪があるということを、9節の前後つまり8節と10節で強調しています。8節では、「8 もし自分には罪がないと言うなら、私たちは自分自身を欺いており、私たちのうちに真理はありません。」と、言われています。10節も基本的にはそれと同じことを言っているのですが、罪を犯したことがないというなら、私たち自身を欺くのではなく、神を偽り者にするのだと、より強い口調でそれが主張されています。

「神を偽り者にする」それは将に、今確認している神様のご性質の2つ目、すなわち「神は真実で正しい方」であるということに真っ向からぶつかる、相容れない主張です。自分には罪がない、罪を犯したことがないと言うことは、それほどのことであるということです。

本論2-②：罪が赦されるのは、神の真実さと正しさのゆえである

9節の二つ目のポイントは、「私たちの罪が赦されるのは、神の真実さと正しさのゆえである」ということです。神が真実で正しい方であるという神様のご性質が、なぜ罪の告白をすることによって罪が赦され、すべての不義からきよめられることに繋がるのでしょうか。それは、神様がそうなさるとお決めになり、そして約束してくださったからです。神様はご自身がなされた約束に忠実であり、ご自分が決められたことを覆すことはなさいませんでした。

神さまが約束してくださったこと。神様がお決めになられたことを、ヨハネは2：1-2に記してくれています。それは、主イエス・キリストを私たちのとりなし手として与えてくださるというお約束でし

た。神様は聖書を通して、ずっと昔から救い主＝メシアをお与えくださると約束していました。そのメシアこそ、イエス・キリストに他なりません。そして、イエス様は、私たちの罪のために、私たちの罪が赦される為に、私たちの身代わりとなって、十字架で死んでくださったのです。

ヨハネが2：1、2に記してくれていることを見てください。「1 私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。しかし、もしだれかが 罪を犯したなら、私たちには、御父の前でとりなしてくださる方、義なるイエス・キリストがおられます。2 この方こそ、私たちの罪のための、いや、私たちの罪だけでなく、世全体の罪のための宥めのささげ物です。」

神様は、ご自身の御子であるイエス様を私たちに与えてくださいました。イエス様は、私たちの罪を赦すためのいけにえとして、そのいのちを献げてくださいました。

聖書は、私たち人間には、だれ一人の例外もなく罪があると教えています。私たちはアダムがエデンの園で神様の言葉に背いて以来、ずっと神様の言葉を守ってきませんでした。神様は、人間が神様に対して不義を働き、罪を犯し続けても、ご自分がなされた約束を守れたのです。ここに神様のご真実が現れています。

人は、自分が聖くならなければ、救われたいと思ひ込んでいます。自分の力や聖さによって、救われる資格が得られるのだという思い違いをしています。しかし、聖書が宣べ伝えているのは、「信じるだけで救われる」という福音です。なぜ、信じるだけで救われるのでしょうか。それは、イエス・キリストが主であると信じるということは、神様が決められた救いの方法、その約束を信じるということだからです。約束を信じるのは、約束してくださった神様が真実なお方であると認めるということです。神が真実で正しいお方であると信じること以上に、私たちに何かできることがあるのでしょうか？

本論 2-③：罪の告白は神との交わりの中でなされるときに意味がある

3つ目のポイントは、「罪の告白は神さまとの交わりの中でなされるときに意味がある」ということです。罪を告白するというのは、単に犯した罪をリストアップしたり、つらつらと並びたてて、口にすることではありません。「告白」という言葉のギリシャ語は、「同じことを言う」という意味の言葉です。これは、神様と同じ視線に立ち、神様と同じことを言うという意味です。つまり神様の言葉と一致したことを言うこと、それが「告白」ということです。罪の告白とは、神様が「罪」だということを、「罪」だと認めることです。そういう見解の一致が、神様との間でなされるということであり、そこには神様との交わりの中でなされることに意味があります。神様と関係ないところで、いくら罪のリストを唱えてみても、何もありません。

そして、罪の告白は、神様の約束に立ち、神様の約束を信じるからこそできるものです。救い主である御子イエス・キリストを信じて、罪を告白するなら、イエス様のとりなしのゆえに許されるという約束、そしてイエス様の十字架の血潮によってきよめられるとの約束があるから意味を成すものです。この神様の約束を信じない者には意味を成さないものです。信仰があってはじめて成り立つものです。約束してくださったお方と、その約束を信じ、神が真実で正しい方であると信じる者に与えられる、神様の恵みなのです。

そして、自分ではこんな罪は赦されるはずがないと思っていた罪さえも、繰り返し繰り返し罪を犯してしまう自分に、自分自身が嫌になって、自分が赦せなくなるような時にも、そんな罪さえも、神様はイエス・キリストのゆえに赦そうと言ってくださっていると分かるとき、そして事実赦してくださったと分かるとき、神様の愛の完全さをまた深く知ることができるのです。神様が真実で正しいお方であることを教えられます。神は光であり、神には闇が全くないということをもたもう一度確認することになります。

罪の告白は、神さまとの交わりの中でなされることに意味があります。しかも、そうやって罪を告白し

赦されることを通して、私たちは、神様との交わりの中に、神様の光の中にとどまり続けることができるのです。

結論：私たちに照らす光

今朝は、「神は光であり、神には闇が全くない」、そして「神は真実で正しい方である」という2つの点について確認してきました。

最後に、今一度、「神は光である」という点について、考えたいと思います。

神さまの光に照らされていないとき、人は闇の中にいました。闇の中を歩んでいる人は、自分がどこに行くのか分かっていません。闇が目を見えなくしているからです。(2：11)

私たちは、その暗闇の中で、特に何が見えていなかったのでしょうか。

それは、神の愛です。神を信じる者となる前、私たちは神の愛を知らず、神様に愛されていることを知りませんでした。神様の愛に触れるまで、イエス・キリストの十字架の愛に触れるまで、本当の愛というものを知りませんでした。神の愛という、欠けのない完全な愛が存在していることを知らずにいました。

私たちが知っていたのは、自分なりの愛でしかありませんでした。そしてその欠けだけの愛で何とか人を愛そうとして苦しんでいました。自分には愛がないと嘆いたり、自分自身に嫌気がさしながら、どこへ向かえばよいのか分からずにいました。

そんな人々に対して、私たちはヨハネとともにこのように言うことができるはずです。「神様の完全な愛の中、私たちとともに憩いましょう」

神また主イエスとの交わりを通して、私たちの心が神の愛に照らされるまで、私たちは愛において暗闇の中にいました。暗闇の中にいたので、愛の対象を間違えて世にあるものを愛してしまったり、愛し方を間違えて、人とすれ違い、ときに憎しみを覚えてしまうことがありました。神や人をうまく愛せないところに、私たちの罪の悲しい現実があります。

神様はそんな私たちに、イエス・キリストの十字架を通して「愛」を教えてくださいました。イエス様の愛に触れて、目が開かれるとき、私たちの霊は神様からいただく「いのち」によって輝きます。私たちに照らす光、それは神の愛です。

もし人を赦すことができず、自分の愛のなさに苦しんでいる人は、十字架の苦しみの中で自分を十字架にかけた人々のために祈られた主イエス様のもとに来てください。

もし誰からも相手にされずに愛に飢えている人がいたら、悪霊に着かれて墓場に住んでいたたった一人を助けるためにガリラヤ湖の向こう岸まで出かけて行ったイエス様のもとに来ていただきたいと思います。

聖書の御言葉を通して、イエス様が人々に向けられた眼差しや、語られた言葉に触れていただきたいと思います。弟子たちに対して示された愛を見て、イエス様というお方のことをもっと深く知って欲しいと思います。

イエス・キリストこそ、すべての人を照らすその真の光であると、聖書は述べています。その光の中をともに歩んで参りましょう。